



III

閃の軌跡
七編
二〇四年
クロウ・アームブラスト夢小説
PDFサンプル
デフォルトネーム記載アリ

これは、とある人物たちのかげがえのない日常の記録だ。

四月·····	〇〇五
五月·····	〇八五
六月·····	一一九
七月·····	一八九
八月·····	二五五
九月·····	三〇五
十月·····	三六三

四月

入学式と同日に入寮式もあり、とりあえず何かあったら二年生に投げて大丈夫だよ、というのを一年生に伝えた三月が終わって金曜日。

新生活に慣れようとしている新入生への対応をして何かと忙しくしているトワは今日も上がるのが遅いらしい。書類整理を代わることは出来ないけれど、せめて晩御飯を差し入れようとサンドイッチとフライドポテトをこさえたところで腰につけているポーチから音が鳴り始めた。

ちよと編み籠のランチボックスにモノを詰め終わったところだったので、エプロンを解きながら通信に出る。

「はい、セリ・ローランドです」

「こちらトワです。今大丈夫？」

「うん、平気だけどどうかした？」

A R C U S を肩と耳で挟みながらエプロンを巻き畳んで、台所の端に置いていたジャケットを羽織る。校内にはトリスタの住民の方々も入るので必ずしも制服でなければならぬということはないけれど、制服を着ておいた方が何かと面倒がないというのは確かなのだ。

「実は……その、助けてもらいたいことがあって」

助けてもらいたいこと。トワがヘルプを出すこと自体珍しい気もするけれど、逆に部下の生徒会役員ではない人員でない駄目だと彼女が判断したなら、それは正しいのだと思う。

A R C U S を持ち直してから台所の各自の私物置き場にエプロンを突っ込み、ランチボックスを携えつつ何とか寮の玄関扉に手をかける。

「概要は？」

『生徒手帳に載せるA R C U Sの説明書についてなんだ』

「なるほど、わかった。10分ぐらいでそっちに着くよ」

寮を出たところで、学院から続く坂道を降っていく赤い制服の数人が見えた。A R C U S 特科クラス——通称VII組。二月頃から噂には聞いていたけれど、白と緑しかなかった制服の中にあの赤は鮮烈だなどと思う。目が慣れるのに少し時間がかかるかもしれない。

夕陽の中で楽しそうに話している彼らを見送り、私は見慣れた坂道を籠の中身が暴れない程度の速度で駆け上がっていく。正門を通り、本校舎と図書館の間の道を抜けていけば二階奥側の窓からは煌々と灯りがこぼれているのが見えた。

学生会館へ入ると片付けをし始めているジェイムズさんと食堂のサマンサさんに挨拶をして階段へ。ノックをして入った部屋には、いつもの面子が揃っていた。どうやら私が最後のよう度。

「セリちゃん、来てくれてありがとう！」

「あー、五人全員いたのかあ。サンドイッチ作ってきたんだけど足りないね」

「それなら下で摘めるもん頼んであつから丁度いいくらいだろ」

クロウの言葉でさつきサマンさんから、頑張つてね、と言われた理由に合点がいった。なるほど。

「それで何があつたの？」

抱えていた籠を執務机の前にあるソファ席のテーブルに置いて近付くと、ジョルジュからペラりと紙が一枚寄越された。

「……ARCU S 特科クラス用の生徒手帳がまだ作られてない？」

「僕も今さっき聞いたけど、そういうことみたいだね。僕たちの時は説明書も仕様書も出来上がっていなかったわけだけど、正式なカリキュラムとして運用させるなら生徒手帳にARCU S の操作説明は入れて然るべきなわけで」

「その草稿を誰も書いていなかった、ということらしい」

苦笑したアンが腕を組みながら肩を竦める。

「……言っちゃなんだけど、それは生徒会の仕事なのかな」

「いやどう考えたって軍だかなんだかあるいはサラないしは別の教官陣の仕事だろ」

私の率直な疑問にクロウが答える。だよなあ。

「でも教官の方々も忙しくしてるし、その」

「まあでも、ARBUSについてなら学院で誰よりも知ってるのはオレらだろーよ」

クロウの言葉にトワを除く三人が頷く。扱ったこともない導力器について生徒会役員が書くより、私たちが出張った方がまだマシなものが書けるだろうことは明白だ。だからトワも私たちが巻き込む選択をした。同期に迷惑をかけることを嫌がって折角の後輩が困る、というのは大変よろしくない。

「生徒手帳って図書館で本借りる時に必須だし、学院生活上結構重要だよな」

この一年でそこそこ図書館にはお世話になったので、生徒手帳の大事さは身に染みている。とか多分一番取り出してるのはあそこだと言うのも過言ではなからうと。緊急事態ならともかく、その他の日常生活で必要になるものではないし。

「それじゃ、愛しいトワのお願いだ。さっさと草稿を上げてしまおう」

「ARBUSの仕様書って今はもう出来てるの？」

「僕の方で今回は出力はしてあるけど、生徒手帳のサイズに収めないといけないからね」

「いっそ通常の生徒手帳にそれつけるんじゃない駄目か？」

「クロウ、添付書類読んで持ち歩く？」

「絶対読まねえわ」

提案しておいて反対のことを澁瀬に言うなあ。まあ添付書類読むし持ち歩くと言ったら他全員から突っ込まれること間違いなしだ。

「これどこまで書く？」

「取り敢えず最低限の仕様つつーか、オープメントの説明とかクオート類の説明だとかか？」

ジョルジュから渡されたARCCUS仕様書にぞっくり目を通しながら思考を口に出すと、おんなじように一応眺めているクロウがそう返してきた。生徒手帳をあんまり分厚くしてもアレだし、やっぱりそういう操作や扱いに関わるところが一番必要かな。

「そうだね、ARCCUSの成り立ちや根本的な内部システムの話は除外しよう」

「戦術リンクやその恩恵についても記載しておくべきだろう」

ARCCUSは実はあれからもアップデートが繰り返され、リンク者間で出来ることに個性が持てるようになった。物理的な追撃だけではなくアーツの後押しなど、リンク感応する人物やタイミングによって効果は様々だ。

「ここには図表入りたいかなあ」

「ああ、それなら前に全員のやつを撮影した写真があるからそれ使おうか」

「セリちゃんのが一番説明に使いやすいかな、四属性のみで複数LINEあるし」

「風と地だからそうだけど、トワのも四属性複数LINEでは」

「後衛導力器オーブメントよりは前衛の方が分かりやすいだろう」

「そういうものかな」

まあ上位属性が入っていると説明として不向きというのは分からなくもないし、となるとトワと私の二択になる。そしてVII組の武器構成を見ると後衛人員より前衛人員の方が多いためそうなるのも致し方ない……のかも。

「そういえばトワと私以外の三人は時属性が入っているんだね」

ジョルジュが広げていたARCSの盤面写真を手に取って眺めるとそんな共通点に行き着いた。

「そういうことなら私とセリちゃんとジョルジュ君は地属性仲間だよ」

「そのの三人が地属性はすげーわかる」

「オーダーメイド品であるし、ちょっとした性格診断みたいなきらいはあるのかね」

「こういうのってどこで何を判断してんだろうなあ」

「私たちが試験運用を了承する前に作られてたからねえ」

あの旧校舎に呼び出されるまでの一週間は学院標準型の汎用戦術オーブメントを使っていたのだけれど、今はもうARCSに慣れ切ってしまったている。

最初は嵌められるクオーツに属性の縛りがあることで制限が感じられたけれど、使ってみれば戦闘スタイルを邪魔しないものだったので特に問題は無くなった。上位属性縛りがある三人……特に空・時のアンは嵌めるクオーツに難儀していたけれど。

「今更だけど火属性が一人もないね、この面子」

「ああ、そういえば」

前にサラ教官に、四人で運用する意見はなかったんですか、という話をしたことがあるけれど、これで私が抜けると風属性もいなくなる。あと学院内では一応主流である剣を扱う人材もいないので、こうして考えるとやはりバランスを取られているのがよくわかる構成だ。

地と水のトワ、時と水のクロウ、空と時のアン、地と時のジョルジュ、風と地の私。うん、アンがさっき言っていたちよつとした性格診断というのはいい得て妙かもしれない。何となく重なっているところがあるのがわかる。そしてこれでいうとクロウと私は全然似ていないんだなあ、とほんの少しだけ苦笑が溢れるのがわかった。

それでもお互いに一緒にいたいと思っていると、そう信じているけれど。

そんな会話をしつつ持ってきたサンドイッチや、サマンサさんが上まで持ってきてくれたホットドックやナゲットなどをつまんでいく。

生徒手帳という小さな紙面にどこまで盛り込むかというのから、どう表現をするのかというのとまで話しあい、とつぷりと日が暮れた20時。途中で用務員のガイラーさんがやってきて、特別に内緒だよ、と施錠を最後に回してくれたのだ。

「うん、これでサラ教官に確認してもらおうね！」

「じゃあそれ終わったら私が端末室で入力するよ。どうせやることあるし」

半日授業の日曜の午後にゆっくりやる予定だったけれど、まあ前倒ししても構わない話だ。今から第三生寮に突撃してサラ教官に草稿押し付けたら、明日の夕方には確認し終わっているだろう。それぐらいはやってもらいたい。マカロフ教官への確認提出は朝一でいい。あの人は何だかんだ最新導力器のARCSについては結構対応が早いのだ。

「終わった終わった。ったく、レポートだってこんな真面目に書いたことねえわ」

「いや、それはちゃんと書きなよクロウ」

クロウの軽口にジョルジュが苦笑で返すのを聞きながら全員で立ち上がる。

サラ教官提出用のとマカロフ教官提出用のと原本として三部作ってあるので、一部はここに置いて、あとの二部を持ち出せば大丈夫だろう。導力複製機が部屋にあるのは便利だなあ。

生徒会室の窓や扉の施錠を確認し、廊下を歩いていく。

「みんな、本当にありがとう」

「あは、トワのお願いなら全員来るって」

「そうそう、普段迷惑をかけてるクロウなんか働かせてやればいいのさ」

「ゼリカお前にだけは言われたくねーんだわ」

「うーん、二人ともなんじゃないかな」

新入生も来たことでいろいろと忙しく、こんな風に長時間五人揃うことは滅多になかった。数日前の入学式の日にあった特別オリエンテーションの準備だつて二手に分かれていたし、その後も生徒会は忙しいのかトワは駆け回っていたのを思い出す。あの日は第二の先輩寮生ということに入寮式準備をするため早々に寮へ帰つたし。

だから久しぶりに聞く応酬に、ふっ、と笑いが溢れる。それを目敏くクロウに見つけられて、ぐしやりと髪の毛をかき混ぜられた。大好きな手のひら。ちょうど一年前はそれが嫌で仕方がなかったのに、時間の流れというのは面白い。

階段を降りたら食堂で腰を落ち着けているガイラーさんが私たちに気が付き、やあ、と。

「終わったかい？」

「は、はい。ありがとうございます！」

トワがぱたぱたと駆け寄って頭を下げるので、私たちも同じように。本来ならもうとっくに閉まっているし、最後に回したとしても戻ってきたらさっさと追い出すべきだというのに、こうし

て待ってくださったというのはトワの人望と生徒会の強さを表している。学院の気質的にどことなくゆるいというのもあるかもしれないけれど。ハインリッヒ教頭は除いて。いや、あの方も悪い方ではないのだ。伝統工芸を扱う街の出身ゆえ、伝統ある学院を大事にしたいというのも理解は出来る話だし。

学生会館を出て、さっさと正門を抜けて坂を下っていく。

「そういえばセリちゃんのスンドイッチ、今日のも美味しかった」

「二、三人だと多少作りすぎたかなと思ってたけど食べ切ってもらえてよかった」

「鶏肉と卵のやつは鉄板の組み合わせだけどやっぱりウマいな」

サンドイッチは具材を作って挟んでいくのが楽しいからつい興が乗りやすいのだけれど、そうして好きに作ったものを美味しそうに食べてくれる人が身近にいるというのは幸せなことだ。

「トワはこれから第三に行くのかい？」

「うん。サラ教官に渡しちやいたいしね」

「アンがついていくなら、私は先に帰ろうかな。籠の中を拭いたりとかしたいし」

「じゃあ僕はついて行こうか。何があるとも思わないけど、一応ね」

「そんならオレは直帰組だな」

お互い、お疲れー、と言って三叉路で別れ、私とクロウは帰寮の道を辿る。といっても分岐点から寮は直ぐそこなので二人で帰るといふほどのものではないけれど。

「いやー、新年度始まってからのトラブルにしては重かったねえ」

「まったくだつたの。予算かかってんだろうしもっと大切にしていればやれや」

クロウの口からそんな言葉が出るとは思わず、少し笑ってしまう。やっぱり何だかんだ面倒見がいいというか、ARCU的な意味で直接の後輩たちのことを気にしてるんだなあ。

室内の明かりが曇りガラスから見える玄関扉を開いて中へ入ると、夜もそれなりなせいか食堂や洗濯室などを含めても一階に人の気配はなかった。

籠のメンテナンスの為に食堂の方へ爪先を向けると、当たり前のようにクロウもついてくる。最低限の明かりだけつけて台所に進んでいた。

「最初の課外活動……じゃなくて実習か。どこになるんだろうね」

「歩いて行けて実習地になる町だとオレらが行ったラントにケルディックにリーヴスか？」

「いやー、正式カリキュラムだし鉄道沿線オンリーかもよ？」

「それは納得いかねえ」

そうなんだ。まあ街道歩いていくのは思い出してみれば楽しかったし、いい経験になるとは確かに思う。

「あの時はいろいろな戦術リンクが切れたりして忙しなかったね」

「だな」

籠の中を覗けばサンドイッチの具材がこぼれているということもなかったので簡単にでいいかと一人頷いた。共用の布巾を水に濡らし、固く固く絞って中から拭いていく。植物を編んでいるので頻繁に丸洗いというのも具合がよくない。夏になったら丸洗いして乾燥する日を設けよう。

「……で、クロウはどうしたの？」

ずっと眺められているのが居心地が悪いということはないので、一緒にいたいと思ってくれているのなら嬉しいけれど。

「ん？ いやー、ARCU Sの写真見た時に何かちっと考え込んでたろ。気になってな」

何でもないことのように言うクロウに、少し目を瞬かせる。やっぱりよく見てくれてるんだよなあ。本当にいろんなことがお見通しだ。

心を落ち着けるために、籠を拭く手を少しばかり丁寧にする。

「……途中で、ARCU Sの固有属性の話になったよね」

「ああ、あったな」

「それで、クロウと自分は重なる属性がないなあって。似てるところがあんまりないってことなのか、とかちょっと考えてただけ。別に似てるから惹かれるわけじゃないけど」

メンテナンスを請け負ってくれているジョルジュでもないのであんまりまじまじと人のARCSの盤面を見る機会はなかったし、ああいう風を集めて比較するということもなかった。だから、今まで意識していなかったことに意識が引っ張られてしまったのだ。

「あんなんだの属性だろ」

「うん、分かってる」

それでも、アンの言葉がわりと腑に落ちてしまっているから。

私が笑ったのが気に入らなかつたのか、クロウは唐突に両頬を軽く引っ張ってきた。そんな戯れのような指先とは裏腹に、紅耀石よりすこし暗い赤が私を真っ直ぐ見下ろして。そつと頬が解放される。

「分かってねえよ。……オレが好きなのは、風と一緒に地面を蹴るお前だつたの。時も水も似合わねえしよ」

「……あり、が、とう」

まさか、そんな風に表現されるとは思わなくて、目線を落としてしまう。ぎゅつと手を握り込んだところで、冷えた感覚に、ああそうだ籠を拭いていたんだった、と我に返り作業を再開する。

顔が熱いのがわかる。だけど決して嫌な感覚じゃ、なかった。

それからぼつりぼつりと会話をしながら、無事に籠を拭き終わって台所を出て階段を昇っている。男性陣は二階なので上がって直ぐのところでお別れだ。だからか、つい、とクロウの捲り上げられた袖を指先で引つ張った。

「どうかしたか？」

「……私も、クロウの水みたいなた適応力の高さとか、助かってる、し……すき、だよ」

時属性は正直よくわからないけれど、流動性のある水だというのは何となくわかる。もしかしたら最初期にあつた陰の部分が時部分だったりするのかもしれない。それでも、私は私に見せてくれているいろんな側面のクロウが好きだ。それだけは間違いない。

「それだけだから、じゃあね。おやすみなさい！」

言い逃げるように階段へ身体を向ければ、手首を掴まれる。振り解こうと思えばきつと出来る程度の力加減だったのに、私はそれをしようとは思わなかった。自覚させられる顔の熱を抱えたままクロウを見やると、へらりと嬉しそうに笑われる。

そんな君の表情に、今日も私の心臓はぎゅっとした。

ライノの白い花びらが舞い散る四月二週目。新入生たちの各教科ガイドダンスも終わり、いよいよ本格的な授業が始まっていく時期になる。

部活動も動いているところはああるけれど、新入生の目に留まるといえばやはり18日の自由行動日が要となるだろう。そしてその日までに『こんな部活があるのか』と興味を持ってもらう、というのが前準備として必要になる。存在を知られていなければ探してももらうことすら叶わない。

とはいっても、だ。私が一人で所属している新聞部はフェルマ美術教官の転勤により事実上の廃部となった。新しく来たメアリー教官はフェルマ教官が一昨年から担当されていた吹奏楽部・調理部・美術部を一人で兼任されることが決まり、さすがにそこに新聞部も、と新任の方に頼む気にはなれなかった。

前年度空いていた人も今年復活した釣皇倶楽部の顧問になることが決まったようで、ARCS特科クラスが発足したこともあり人手があるならその穴埋めに、ということの後任を引き受けてくれる教官はついで見つからなかった。フェルマ教官には謝られてしまったけれど、転勤先でお元気であればいいと思う。

それに例の事件の騒動もあったことでハイシリツヒ教頭からは多少煙たがられていたし、対外

的には実績らしい実績を残せていなかった、というのは私の不徳の致すところだ。かといって写真部に合流するというのも何だか違う気がするので、取り敢えず帰宅部ということでのんびり二年目を送ることに決めた。

特殊課外活動が消えた年度に部活動未所属というのも間抜けな話だと思う。まあでも別軸からの話なのに妙に立て込んで忙しくなることもあれば、暇な時は探してもやることがない、なんてことは地元でもあったのでそういう巡りなんだろう。

まあ、図らずとも出来た時間を使って、あの日クロウに語った夢への実現を探っていこう。

目下の作業としては前年度で最後に申請していた【部活動一覧臨時号】は掲示許可を取得しているので、今日はそれと生徒会掲示物の張り直し仕事をトワからもぎ取ってきた。どうせ学院内全域の掲示板を巡るのでそこ20〜30の紙モノが追加されようとも大した違いじゃない。

「よっと」

用務員のガイラーさんから借りた背の低い脚立を肩にかけ、様々な掲示物と道具が入った箱を抱えて学生会館を出る。この状態で誰かとぶつかったりして転けると骨折しかねないので気をつけて運ぼう。まあ極端に気配を消して学院内を歩く人もそうそういないだろうけれど。

取り敢えずの行き先は図書館かな。

図書館での作業も終わり、本校舎の方へ歩いて行こうとしたところで学生会館から白い制服の三人組が目の前を横切っていく。中心にいるのはすこし色の濃い金の髪の毛の貴族生徒。見たことがあるような気がして立ち止まり、ああハイアームズ侯爵閣下の御子息殿だと思い出した。そういえばかなり歳が近い筈だったので、旧都から出てこられたのだろう。……あまりいい噂は聞かないので、近寄りたいグループではない。

「どうかしたのだろうか」

「へ？」

なので無難に立ち止まっていたら、背後からそんな声が聞こえてきた。振り返ってみると赤いベストを着用した男性生徒。横に立たれるとその身長の高さが如実にわかった。目元がこの状態だと見えないので、クロウよりたぶん高い。いやクロウも隣に立たれるとだいぶ表情は見えないけれど。……そう考えると、視線が合いやすいようにすこし屈んでくれているのかもしれない、と気が付いて内心照れてしまった。

「よければ手伝おう」

「あ、いえいえ。前の道を人が通っていたので危なくないよう立ち止まっていただけです」

重くて難儀していたと思われたのだろうか。嘘ではないラインの言葉を紡いだところで、物を渡して欲しいような風情で両腕を開かれてしまう。どうしたもののかな、とはっきり顔を上げた

ら、蒼穹のような青い瞳が柔和に微笑んで。

「……では、お言葉に甘えますね」

持っていた箱を渡すと、任せて欲しい、と彼は笑った。

「ああ、やっぱりガイウスくんはVII組の」

「ええ。面白そうなクラスです」

お互い自己紹介をして二年生だと分かった段階で謝られてしまいこれまたどうしたものかど困ったら、先達者を敬うのは大切なことですから、と彼にとつての芯に関わることだったみたいなので素直にその謝罪は受け入れた。

代わりに敬語はナシで名前で呼んで欲しいと言われたので、そうすることにした。となるとVII組というか後輩勢は全員名前で呼ぶのを統一してもいいだろうかと考えて、いやそれは相手に対して不義理かなとも。敬語は、まあ取れたり取れなかったりするだろう。

「セリ先輩は生徒会に所属されているんですか？」

「うん？ ああ、友人が生徒会所属で、たまにこうして手伝ってるんだ」

生徒会認証印が捺された掲示物が詰まっている箱を見下ろしてガイウスくんがそう言うので、笑いながら訂正し、本校舎一階入って左手にある掲示板の前へ。

「この部活動紹介を張っていくついでにね」

「これを先輩が書かれたんですか」

「うん」

渡した紙に一瞬目を落としてガイウスくんは少しだけ興味深そうな表情をしてから、画鋏でそれを張ってくれた。

脚立を持つてはいるものの、高いところの張り替えはガイウスくんが行ってくれるようで、私は掲示するプリントをメモと照らし合わしながら抜き出していく方に集中する。

程なくして作業は終わり、次は保健室の方へ。ベアトリクス教官に挨拶をしながら掲示物を張り替え、今度は二階に。

「何か気になる部活でもあった？」

「美術部がすこし」

「絵を描いたりするってことでもいいかな」

「はい。故郷で描いていたんですが、我流なもので習えたらいいと」

「なるほど」

メアリー教官なら親身に教えてくださるかもしれないけれど、部長に教わることを考えているならそれはたぶん無理だと思う。なんせあのクララが今年度美術部の部長になっているのだ。自

分の作品を創り上げること以外に時間を払うとは到底思えない。

「美術部だと部長には頼れないと思うけど、美術の技法書とかは確か図書館にあったりしたからそっちの方を訪ねてみるのもいいかもね。あとはやっぱり顧問の教官とか。メアリー教官は新任の方だけでももちろん芸術に詳しいようだし」

「わかりました」

あ、とは言ってもⅦ組は現時点だと生徒手帳がないので本の貸与が出来ないのだったか。司書のキャロルさんにその辺の話って通っているのかなあ。サラ教官がしてくれている気もしないから後で備品を返しに行くついでにトワへ確認しておこう。

「先輩は新聞部ですか？」

「そうだったんだけど、今年で廃部になって」

「廃部？」

「顧問だった教官が転勤して、代わりの方も見つからなくてね。なので今年は帰宅部です」

「写真部に入られたりはしないんですか？」

二階の談話スペース近くにある掲示板へたどり着き、二人で作業を開始したところで箱の中にある部活動紹介を手にしてガイウスくんが問いかけてきた。

「写真部は去年見た時にちょっと違うなあって思ってた」

去年見た写真部はトリスタや帝都の風景を導力カメラで散策撮影する部活で、自分がしたいことは方向性が異なっていた。散策撮影は好きだけれど、部活動としてやりたいかと言われるとそういうわけでもない。

まあ今年の部長にはフィデリオが就任したようなので、もしかしたら私の好きにやらせてくれるかもしれないけれどそれは職権濫用というものだろう。活動が濁るのはよろしくない。

雑談をしながらも作業は進み、一年生がよく見る場所ということで一階より掲示物は多めだったけれどここもつつがなく終えられた。

残るは修練場だけなのだけれど、どう歩いても均等に遠いので、美術室の前を通りながら中庭を経由して歩いていくことに。脚立を返しに行くのが少し億劫なルートだけれど仕方がない。

音楽室からはピアノの音がして、調理部は今日はお休みで、美術室からはあいも変わらず石を削る音が聴こえてくる。ガイウスくんが気になるのか耳をそばだてるので、少しだけ扉窓から覗いてみようか、と美術室の前で止まったりしつつ階段を降りていった。

「そうだ。Ⅶ組といえばARCSUだけど、使う機会はあった？」

「入学式当日にオリエンテーリングで旧校舎の地下で戦闘実地訓練のようなものを」

「問答無用で落とされたよね」

「もしや先輩も似たようなことが？」

「うん、私は前年度にARCCUSのβ版テスターをやってたね。今回みたいな特科クラスではないものの、その時も集められた全員が落とし穴で地下に案内されたんだ」

そう、ちょうど一年前の今頃。友人関係が構築されている四人の中に入ることが出来るだろうかと悩んだ時期もあったけれど、今ここにこうしている私はあそこで落とされて、試験運用に携わることが出来て本当に幸運だったと心の底から感じる。

あの半年は……いいや、一年は、掛け替えのない日々だった。私にとってだけじゃなく、みんなにとってもそうであったと信じられるほどの。そしてこれからもそんな日々であればいいと願ってしまいそうになるほどに。

「そうだったんですね」

「だからARCCUSで何かわからないことがあったら相談に乗れると思うよ」

「助かります」

落とされた言葉に、ああ私も上級生になったんだなあ、なんてぼんやりと実感した。

修練場の掲示板での作業を終え、もう後は生徒会室に戻るだけだからとガイウスくんを帰した。お礼になるかはわからないけれど、別れ際にARCCUSの通信番号を渡しておいたので、何か困ったことがあれば連絡が来るかもしれない。何もなければそれで喜ばしいことだ。

生徒会室をノックし、馴染んだ気配の二つを察知しながら扉を開けると見慣れた顔がいた。

「お疲れ様、セリちゃん」

「お疲れ、セリ」

「新聞部最後の活動のついでだよ」

アンがいつものように、自分で持ち込んだ紅茶を優雅に飲みながらソファに腰掛けている。脚立を取り敢えず入り口近くに立てかけ、入って右手の長机に箱を置いてから使った備品をそれぞれ所定の位置へ。

「そうだ、セリも一口噛まないか？」

「内容による」

「金曜に全員で集まって晩を食べないかって話さ」

金曜日。自由行動日前日でもないし、わざわざ予定を立てるには中途半端だなど思考したところで思い当たることが一つあった。振り向くと二人とも笑っている。

「いいよ、一年だもんね」

四月十日。私たちが旧校舎地下に落とされた日だ。

「作るのもいいし、食べに行くのもいいかなあ」

「トワの方は大丈夫なの？ 最近忙しいみたいだけど」

「その日は早く帰るように頑張るよ！」

いつも頑張っている気がするのだけれどなあ、と思うのは決して友人としての鼻屑目ではないだろう。そんな自分を蔑ろにしてしまいがちな彼女の身体を案じているからこそ、アンも高頻度で生徒会室に出入りしているんだと思う。

ただただ単純にトワの顔が好きというのも多いに関係しているだろうけれど、友人としてそこを疑いはしない。

「ま、その辺は男どもとも話し合って決めよう」

「ふふ、そうだね」

そんな会話を聞きながら備品収納を再開したところで、そういえばと思いつく。

「全然別の話なんだけど、VII組の生徒手帳ってもう暫くかかる？」

「うん、特急で入れてもらったみたいなんだけど、早くても来週末くらいかなあ」

「何か訊かれてもしたのかい？」

「今日の掲示物の張り替えに通りかかったVII組の人が手伝ってくれて、雑談で図書館を勧めたりしたんだけど生徒手帳ないと本の持ち出し出来ないよなあって気が付いて」

「あ、それならキャロルさんをお願いしてあるから大丈夫だよ。ありがとうね」

「さすがトワ」

いつも配慮が行き届いた細やかな仕事だ。というか特急でねじ込んでいけると言うことはおそろく追加料金が取られていると想定出来るわけで、おおむね税金で運営されている（し、ARCS試験運用は別途予算が出ているだろう）から税金の無駄使い、と言うことになるのだろうか。

学生の身で口を出すものではないかもしれないけれど、お金と人員スケジュールが関わることはもっと別の事務作業が得意な人が管理した方がいい気がする。サラ教官の資質として向いていないと言うのもあるし、そもそも担任教官を勤めている一人にすべてを求めるのはよくないのでそっちの方が現実的かつ効率적だろう。今回のは他の人が気付けた可能性もあったろうし。

とはいえ教員数や生徒会役員数と仕事の重さを考えた上で現実的かというところ。

「……」

一生徒の懸念なんて学院側で既に承知しているだろう、とは言いたいけれどARCSの想定外仕様部分のことを考えると一蹴するには僅かばかりの不安があるというのも確かな話で。

まあ後でまた考えておこう。どうにかこうにかトワの負担が軽減出来る案を出したい限りだ。

「今日はもう二人とも上がりでいいのかい？」

「あ、私は用務員室へ脚立返しに行く」

「私はあと五分くらいかな」

「じゃあ久しぶりに三人一緒に帰ろう」

「それなら急いで返しに行つてこようかな」

ハイインリッヒ教頭に見つかつたら確実に目をつけられるし、そもそも私の速度で校舎内の角を曲がるのは危ないので、視界が開けている道ということで中庭を経由しよう。気配察知が完璧と驕るのはやつてはいけないことの一つだ。

そんなことを考えつつ脚立を持って部屋を出ようとしたところで、セリちゃん、とトワの声。「走るのはいくからね」

「……はい」

どうやらお見通しだったようで釘を刺されてしまう。教頭以前の問題だったようだ。

安全速度で用務員室まで戻り、そこにARCSの通信で正門集合となつたよう都合流したらクロウとジョルジュも揃っていた。クロウは技術棟や購買でたむろしていたようで、飯どうすっかなあ、なんて。じゃあ久しぶりにキルシェでも行こうか、と提案したら全員乗ってきて笑ってしまった。

記念日でも記念日じゃなくても、一緒にいたいと思える仲間たち。
談笑するみんなを見て、心がじわりとあたたかくなる。

思い出をまた一つずつ積み重ねて、この一年が楽しく穏やかに過ぎますように。

結局気兼ねなく騒げる場所がいいと言うことで、靴を脱いで寛げる私の部屋で各自の得意料理を持ち寄って晚餐会ということになった。食堂は他の生徒たちの目もあるし、キルシェももしかしたら他の人に気を使わせてしまうかもしれない。

つまり、どういう意味であつても五人だけで食べたいというのが全員の総意だつたようだ。

「得意料理つて縛りだつたけど、こうも全員バラけてると意思疎通を感じる」

「そうだねえ」

狭い座卓に所狭しと乗せられている料理を見て私はそう呟いた。

クローはピザを焼き、ジョルジュはグリルチキン、私がチーズドレッシングサラダ、アンはスープでトワがシフォンケーキ。まあ全員ある程度お互いの得意料理を鑑みてチョイスしたのだからけど、あんまりにも過不足なくて笑つたぐらいだ。

「さて、それでは、この一年に乾杯！」

「[[[[乾杯！]]]]」

アンが林檎ジュースを掲げて音頭を取ったところで、各々自分のグラスを掲げ縁を鳴らし合わせた。ジョルジュが切り分けてくれたチキンを早速口に含むと、腹に詰められていた野菜がしっ

かり油を吸っていて、これはバゲットを焼いてくるべきだっただろうかと瞬間的に後悔する。いやでも穀物系はピザもあるし我慢我慢。

「鶏の火の通り加減が絶妙。最高。さすがジョルジュ」

「そう言ってもらえてよかったよ」

「アンちゃんのスープ美味しいね」

「ラーメンの出汁を取る技法を少し真似てみてね」

「このドレッシング、木の実が砕いてあんのか？」

「そうそう。マヨネーズを牛乳で伸ばして、チーズとかレモンとか胡椒とか木の実とか加えた」わりとジャンクな味で美味しいな、とクロウが言うので笑みがこぼれる。森の恵みは熱を通さないと美味しくもないものもたくさんあるけれど、生で食べられるものは子供の頃の貴重なオヤツだった。今回は折角ならと故郷のティルフィルに連絡をして材料の木の実を送ってもらったのだ。「それにしてもいろいろありはしたが、やはりそこがくつついたのが一番の驚きだったか」

「よく言うぜ」

そこ、とアンに指差されたのはもちろんクロウと私なわけで。口をとんがらせて憎まれ口を叩くクロウの気持ちは少しわからないではない。だってアンは、私よりも、下手したらクロウ本人が気付くよりも以前にクロウの感情に気が付いていた節があるらしいのだから。

「うーん、でも私は結構納得するかな。戦闘でも息ピッタリだもんね」

「私生活ではセリが支えてるきらいがあるけどね」

「まあその辺は前からだろ」

「もう少ししつかりしてくれてもいいんですけどすよクロウくん」

でも頼られんの嫌いじゃねえよな、なんて言葉と共にこてんと頭に頭が乗っかってくるので、ええい邪魔邪魔、と頭で押し返しておいた。

「やさしくしてくんねーのかよ」

「この状態でそれを求められても困るんだけど？」

「つまり……クロウ、後で顔を貸したまえ」

「何でだつつの！ カノジョに優しくされたい願望くらい誰にだってあんだろ！」

人の目があるところでそんなことを言われても、ということはつまり、うん、そういうことなわけだけれど、当たり前のようにアンには真意が拾われてしまっているし、アンの発言で完全に他の二人にも理解されてしまっただろう（そうでなくても解られていたろう、というのはこの際無視をする）。

ああもう恥ずかしい！何か話題を変えなければと頭を回したところで先程のアンの言葉が脳裏をよぎる。そうだ。この一年ずっと不思議だったことがある。

「い、一番の驚きといえばさ！」

「うん」

強引な私の話題転換にジョルジュが乗っかってきてくれた。ごめん本当にありがとう大好き。「その……四人はどうやって知り合ったの？ アンとジョルジュが元からの友人つてのは知ってるし、トワとアンはまあアンがナンパしたんだらうなって想像がつくんだけど」

「あはは、私とアンちゃんはその通りだね」

「クロウだけが謎すぎるでしょ、その面子」

わかりきった話として全員クラスが異なるし、クロウがトワやアンをナンパするとも思えず、かといって知り合いでもないジョルジュが取り仕切る技術部にわざわざたむろする理由はない。この中でクロウだけが浮いているのだ。

「あー、本校舎の二階に上がると談話スペースあるだろ？」

「あるね」

「そこでちょっとゲームで賭けたりしててなあ」

「えっ、クロウ君そんなことしてたの？」

咎める声音のトワに、さすがに時効だろ、とクロウは笑う。よくハイインリッヒ教頭とかに見つからなかったなあ。いや見つかったとしてもいの一発に逃げ出していただろうけれど。

「そしてそこに私が参戦して根こそぎ奪ったのがファーストコンタクトだったかな？」

「あん時のお前の顔は一生忘れねえわ」

心底嫌そうな顔をつくって言うものだから、もしかしてアンはクロウのそういう物怖じせず歯に衣を着せない態度が気に入ったのかもなあって考えてしまった。だからこそ、空虚に笑うのが耐えられなかったのかもしれない。突き詰めるとエゴだ。

そうした中で私たちは課外活動というだけでなく一緒にいることを選択した。課外活動以外で接さない、という行動はきつと出来ただろうけれど選びはしなかった。

「いろんなところで縁が交わったんだねえ」

「むしろ私はあの日までセリに気が付かなかったのが気になるところなのだが」

「お前ほんとに初日からコナかけまくってたもんなあ。噂だけは流れてきてたぜ」

「アンはルーレでもずっとそうだったよ」

「だからいいってもんでもねえわ」

特定の傾向を持つ女性に敏感なアンゼリカ・ログナー嬢が私に気が付かなかった理由は、まあ極めてシンプルだ。

「私が避けてたからだよ。アン個人を避けてた……こともあるにはあったろうけど、そもそも賑やかな場所を避けてたというか。アンの周りは特に人が絶えなかっただろうからね、目視できな

ければ知ること出来ないでしょ。物理的に一番遠いクラスの平民なんて」

「人嫌いもそこまで行くど筋金入りだな」

クロウにさらりと評されて、首を傾げる。

「……人嫌いというわけじゃないと思う、けど」

人が嫌いというよりは、うっかり人目につくのが苦手だったのだ。誰かの視界内に入るということは、どこか何かのタイミングで誰かの興味をひく可能性がある、というわけで。自意識過剰の自覚はあるけれど、そもそも試行回数を極力減らすとなったら、誰の目にも映らないというのが手っ取り早いのはまず間違いない。先天的なものか後天的なものか、もう判断することは難しいけれど、たまに私は極端にパーソナルスペースが広がるようだ。

とはいえ、合同戦闘訓練も定期的にあつたし、ARCS試験運用の総括で学年生徒の目の前で大立ち回りをさせられたりもして、何より学院祭の講堂でライブをやったりしたので、ある程度視線に晒されることに慣れはしたけれど。

それに、入学以前よりもずっと、私は強くなった。

筋力的にも、技術的にも、精神的にも。ルーファス理事と面会を果たした際の、自分の不甲斐なさを思い知らされたあの頃よりいろんな側面で成長している自負が、今の自分をしっかりと支えてくれている。これはきつと誇りと呼ばれるものだ。

「人嫌いって言うより、内側を大切にしたいからこそ外との関わりを浅くしてる感じかなあ」
黙って話を聞いていたトワが静かに言葉をこぼした。視線を向けると、金糸雀色の瞳がにこりと私に笑いかけてくる。

「あー、懐に入れたら最後、ずっと大事にしそうでもんな」

「うん。だからこそテリトリーにはいれる人が限られてる、ってイメージ」

トワから見えている自分は、そう、らしい。というかみんな、なるほどな、という顔をしているので射ている表現なのかこれ。えっ、私ってそんな感じなんだ。

他人から見た自分というのは、何だか不思議なカタチをしている。

「それなら、僕たちは幸せ者だね」

「ああ、そういう性質のセリと共に在れたというのは喜ばしい」

アンとジョルジュもそんな風に乗ってきて、ぐ、と言葉に詰まってしまった。

みんなと一緒にいられたことに対して、私の方こそ感謝したいのに。取るに足らない一般生徒である自分に斥候という任務を任せ、信頼してくれた。その信頼に応えたいと願った。そして果たすことが出来たと、自己認識できる、それそのものが宝物だ。

「ふふ、セリちゃん顔真っ赤だよ」

だけどそれをどう言ったらいいのかわからなくて黙っていたらそんな指摘が飛んできて、ぐう

う、と呻きながら床へ倒れるようにクロウの背中に隠れた。ちょっと助けて欲しい。

「おうおう、見せもんじゃねえぞお前ら」

クロウのそんな声に次いで、笑い声が落ちてくる。

大切なものが増えるというのは、弱くなることだ、と表現したのは誰だったか。たしか昔読んだ本にそんなことが書いてあった。けれど私はみんなと一緒に強くなった果報者なのだ。

「すみません、生徒手帳完成の連絡を頂いたツールズ士官学院の者です」

生徒会の代行者として、生徒手帳の印刷を頼んでいた帝都の印刷所に引き取り証を携えて入っていくと受付の方は、ああ、と合点がいった顔で応接室の方へ通してくださいました。

送付となると時間がかかるし、トリスタの外へ出る可能性がある自由行動日前には生徒手帳を全員に渡しておきたい、ということとで人力で引き取りに行くのが一番早いということになったのだ。そしてこういうことにフットワークが軽いというか、行動範囲的に一番適任であるアンは今日自動二輪部の活動をしているらしく連絡をもらった段階で既に通信圏外に出てしまっていたのだとか。

「お待ちせして申し訳ありません」

「お忙しいなか時間を取って頂きありがとうございます」

そうこうしていると人が入ってきて、物が机の上に置かれる。紺色のカバーに有角の獅子紋が刻まれていて、見た目だけでいえば私たちちのと変わりはない。

お辞儀をして、改めて九人分の生徒手帳を見据えた。名前欄の部分まで印刷されているか一応簡易的に渡されていた名簿を片手にチェックして、うん問題なし。中も乱丁落丁は特にないよう

だ。顔写真は生徒会で貼り付けるし、その上からプレス割印とヴァンダイク学院長の代表者職印を捺してもらえばようやく渡せる形になる。なんとか17日の夕方までには間に合うだろう。

「わざわざ引き取りに来て頂きすみません」

「いえ、こちらが無理を通してもらっている立場です。来年はこういったことがないよう努めさせて頂きます」

梱包や受け取りのサインなどの事務手続きを終えて印刷所を出たらもう空は橙と藍が溶けあっていて、学院に戻る頃にはとつくに陽が落ちていている時分になるだろうか。通信を入れてから急いで帰ろう。

帝都駅で列車を待つ間に晩御飯用のサンドイッチを買い、生徒会室へ走って飛び込んだらそこにはトワとサラ教官が待っていた。他の生徒会役員はとうに帰したのか部屋の中には二人だけ。

「あ、セリちゃんおかえり、ありがとう！」

「取りに行ってくれて助かったわ」

「ただいま、トワ。教官、こちらが生徒手帳です」

渡した品物を二人がさくさくとまたチェックしていき、すべて見終わったところで二人の顔が上がった。

「いやー、なんとか自由行動日に間に合ったわね」

「……間に合わせた、んですよ。サラ教官」

思わず出た私の苦々しい言葉にか、トワの目が丸くなる。

しかしどう考えたって原稿の作成から現物の引き取りまで、生徒会どころか教員事務員含めても満足に回せないというのはあまりよろしくないことだろう。特にこれは最終的に後輩たちが引継ぐことになるわけで、事実、生徒手帳完成の遅延は彼らの不利益になっている。筈。

「正式学級なんですし事務員雇いましよ。身分証明書が遅延はさすがに擁護出来ません」

「そうなのよね。トワも生徒会長になっちゃったし、事務仕事を回せる人員がいなくて」

「す、すみません」

「トワが謝る話じゃないよ」

ここで生徒会……というかトワに仕事を振るとするのは酷な話だ。ただでさえ賢いが故に『見える』ものが多くて学院のいろいろな制度にメスを入れているというのに、前例がほぼない特別カリキュラムの事務仕事を任されるといのはあまりにオーバーワークすぎる。

去年のことを考えると既に実習地の選定・伝達・交渉はとうに終わっているだろうけれど、それに付随する資料作成などは随時発生するもので。

「そうだ、君が手伝ってくれるのはどう？」

「へ」

君。その呼称が指しているのはもちろん（私が苦言を呈しているということからも）トワな筈はなく、そして発言者であるサラ教官を除けばこの空間には残り一人で、つまり明確に私を示していた。

「考えてみれば去年いろんなことを調べてたし導力端末も得意だし、ある程度どういう流れでカリキュラムが動いていくのか理解してるわけだから適任じゃないかしら」

いろいろ、言いたいことが、脳内を駆け巡りは、した。しかしここで自分が断ったら事務員は特に増えることもなくトワが巻き取ってしまうだろうな、というのも理解したし、彼女なら何だかんだそれをやり切れてしまうだろうとも。

「……わかりました。それでいいです」

「決まりね」

「セ、セリちゃん本当にいいの？ 生徒会でやるよ？」

「大丈夫、決めたよ。教官には去年お世話になったから恩返しも兼ねてね」

課外活動できちんと見守ってくれてはいたし、放課後にナイフ投げや剣の個人指導をして頂いたりもしたし、一緒にバーに行ってもらったりもした。トワの身体も心配だし何より、赤い制服を着た彼らが学生生活に集中出来るよう奔走する一年というのも悪くないと思ったのだ。

まあ部活動もなくなり、なかなか時間があるというのも後押しになった。

「それじゃあ今月のことについて話したいから、明日の放課後は教官室に来てくれる？」

「はい」

生徒会室から出て行く教官を見送って、買ってきたサンドイッチでも食べながらトワの仕事終わりを待つかといつものソファに座れば、セリちゃん、と控えめな声がかけられる。視線を向けると、すこし申し訳なさそうな表情。

「——ありがとう」

けれど発された言葉はそういった類のもので。

その感情の揺らぎが、意思が、嗚呼本当に好きだなと改めて感じたのだ。

一二〇四年四月十八日（日） 自由行動日

九時頃にトリスタを出発し、鉄道沿線で揺れる秋蒔きのライ麦が輝く風景を車窓から眺めながら一時間。VII組初めての実習地の片割れであるケルディックに到着した。目的地は工房オドウィンだ。

マカロフ教官曰く、オドウィンはARCCUSの先行提携店ではないようで、VII組のサポートのために一度実物に触りたいという要請があったらしい。パルムの方はハイアームズ侯爵閣下のご厚意により、旧都にいるARCCUS先行提携店の技術者が派遣されるらしいので、トリスタに近いケルディックは学院の方で案件を巻き取った、ということだ。

であるのなら派遣するのはジョルジュが適任なのではと言ったのだけれど、ジョルジュはジョルジュで忙しく手が離せなかったようだ。なので、つい先日からVII組担当教官補佐になってしまった私が駆り出されている。簡易的な整備であればさすがに自分で出来るようにはなっていないとはいえ、いいのかなあ。

そんな経緯のため学院代表として赴くので制服着用の上で一応武器を携行しているけれど、ARCCUSを預ける以上は町の外に出るつもりもない。さすがに過剰武装だったかと駅舎から出て一歩、そう痛感した。

新聞売りの少年の元気な声、観光に來たのであろう人々の足音、そうして町の中心から軽やかに伝わってくる賑やかさ。東の交易地と名高いケルディックの大市。

大穀倉地帯として帝国にとつては外せないのももちろん、帝都・公都・貿易都市を結ぶ中継地点として発展してきた場所でもある。農作物から始まり、公都の職人通りで磨かれた宝石類にミンクの毛皮、果ては大陸諸国の輸入品までも商われるため、大市の横にはクロイツェン領邦軍の詰め所が構えてあるのは当然のことと言えよう。

そんな領邦軍のお膝元で武器を持っているというのは、逆に心細いというものだ。

一応自分も軍関係者とはいえ、一介の学生というのも確かなので目をつけられないうちにさつさと用事を済ませてしまおうと内心で領いた。

地図を確認してから駅を出て右手の方に歩いていくと程なくしてそれらしい看板が見える。ギイ、と年代を思わせる重い樫の扉を押すとカランカランとベルが鳴り響き、カウンターに若い男性、奥の方に鍛冶仕事をしている老年の男性がいた。

「いらっしやいませ」

「こんにちは、初めまして。本日何うと連絡を入れていたツールズ士官学院のセリ・ローランドと申します。サムスさんでよろしいですか？」

「ああ、貴方がありがとうございます」

サムスさんが置いていたARCCUSの仕様書を奥から持ってこようとしている間に、私は足につけているポーチから自前のARCCUSを取り出した。

「これが最新戦術オーブメント、ARCCUSですか」

「はい。スロットの開閉などは従来品と同じですが、回路が少し複雑になっています」

元々仕様書は読み込んでいらっしやったようで、疑問は既に箇条書きにしてくれていたのを読んでみると自分にわかることばかりだったので、一時間半ほどで当初の疑問は解消できたと思う。その上で触ってみるのも肝要だとARCCUSを預けて二〜三時間ほど町をぶらつかせてもらうことにした。

私は私でサムスさんから質問されたことはしっかり持ち帰ってマカロフ教官やジョルジュと共有しなければならぬ。ARCCUSが汎用品として広く普及する際に、仕様書の穴を埋める形に使用されることだろう。

そして投げかけられた質問から考えると、おそらくサムスさんはARCCUSの仕様についてかなり深く理解されていると感じた。だからこそ預けることに不安はなかったし、これなら来週の特別実習での調整もお任せして大丈夫だろう……なんて言い方は傲岸不遜かもしれないけれど、ARCCUSを理解するのは難しいというのを私たちは身をもって体験させられているのだ。最新技術というものは得てしてそういうものかもしれないけれど。

「宿泊先も一応見ておこうかな」

大市の屋台でご飯というのでもいいかもしれないけれど、かなり長時間喋っていたせいか活動時間の割には空腹度合いが強い気がする。となれば、宿酒場に行かない理由もない。

幸い風見亭は工房近くにあり、そのまま流れるように扉を開けた。ふわりとバターの良い香りが漂ってきて、昼時ということで店内も賑やかで楽しさが溢れている。大荷物を持った商人らしき人から、地元の方らしき人まで。

一人ということでカウンターに通され、メニューにおすすりめだと書かれているオムライスとサラダを頼む。地の物である新鮮な卵やバター、自家製ケチャップなどから作ってくれるようで、料理の音まで含めていい店だと出来上がってくるまでぼんやりカウンター内を眺めていた。

「士官学院の子かい？」

少し多めの昼食を食べ終え、水を飲みながら一息ついたところで女将さんからそう言葉が。まあ肩に校章もついているし、分かる人は分かるだろう。特にここはサラ教官が懇意にしているお店のようだし。

「はい、トリストタから来ました」

「来週うちで実習やるからその兼ね合いかね？」

「いえ、宿泊先についてはサラ教官が既に段取りをつけているという話だったので、単純に美味しそうな匂いに釣られました。実習の準備で訪れたというのは間違いないですが」

「そうそう、サラちゃんから連絡が来てね。男女同室で部屋を用意出来ないか、って言われたんだけど……本当にいいのかねえ」

男女同室。記憶にあるなあ。ちょうど一年ぐらい前のことを思い出して少し笑ってしまう。

「士官学院生ですから、入隊すればそういうこともあるでしょうし、よければそのまま是非」

「そうかい？」

「二年生である私もそういった訓練をしたこともありますから」

「なるほど、じゃあ本当に構わないことなんだね」

本当に気を遣ってくださっていることが伝わってきたので、サラ教官の言葉を後押しする。

これは私たちがそうだったからそうする、という経験の話ではなく、眠りを預けられない相手に背中を預けるというのは難しいというのがある。まあそもそも、ツールズに入学出来て尚且つⅦ組に所属することを選んだのだから、自分からそういった方向性の不和を招くようなことはしないだろう。男女ともに。

「はい。来週は後輩たちをよろしくお願いいたします」

「任せておくれよ」

気のいい笑顔を見せてくれた女将さんにお礼を言って、会計を済ませて外へ出る。時刻は十二時半。ARCCUSを回収しに行くにはまだ早いし大市でも見てまわろうか、と思索しながら駅前まで戻ると周辺地図の看板が目に入った。そうしてとある一点に視線が吸い寄せられる。

——ルナリア自然公園。ヴェスチーア大森林の一部を整備・管理し、一般人でも散策できる場所として公開されている森林区域だ。

「……」

ARCCUSは、ない。けれど、そもそも士官学院に入る前、地元で魔獣と戦う時は戦術オーブメントなんて持っていなかった。この辺りの街道に出てくる魔獣程度なら、ARCCUSのサポートがなくても大丈夫ではなからうか。

考えれば考えるほど、そんな内なる声が聞こえてくる。

数分考えて、私はその心の声に折れることにした。

楽観的に考えた通り、導力車の通りもそれなりにあり、魔獣よけの街道路灯も機能しているおかげか殆ど魔獣と遭遇することなく公園へ続いている坂道の下まで順調に来ることができた。

のだけれど、遠目に見ても公園入口の門は閉まっているように見えて、一抹の不安が胸をよぎる。そんなまさかと思いながら近づいて行くと、門の傍らに見知ったような気がする銀髪が。

「——クロウ？」

人違いだったら恥ずかしいな、と思いながらも声をかけてみるとA R C U Sを見下ろしていたらしい視線が私に投げられ、驚きの形に。やっぱり私服のクロウだ。

「なんでお前こんなところにいんだよ。しかも制服で」

「私は来週のVII組実習の補佐でちよつと教官に駆り出されて」

なんで君がここにいいのか、なんて私の台詞でもあるのだけれど。

「あー、なるほどなあ。そういうえげつなこと言ってたか」

「で、クロウは？」

今日も今日とて帝都に行くとかしているのならばわかるけれど、こんなところに用事があるとは到底思えない。公園散策が趣味だというのは一度も聞いたことがないし、事実そういうわけもないだろう。いや、そうだったっていうのなら嬉しくはあったりするけれど。

「……」

どうにも気まずそうな顔をするので、言いたくないなら別にいいよ、と言いながら門に近づいて行く。取っ手を掴んで引っ張ってみるも、かしゅん、と金属が擦れる音がするばかりで開く気配はまるでない。やっぱり閉まっているらしい。

「管理の都合上、少なくとも今月いっぱいまでは閉まってみるみたいだぜ」

「そうなんだ。残念」

ため息を吐いて踵を返したところで、クロウも一緒についてくる。てくてくてくてく。妙に沈黙が続いていたけれど襲ってきた魔獣は特に問題なくいなしたところで、クロウが銃を腰に収めながら顔を曇めるのがわかった。

戦術リンクがないとはいえ怪我をするような要素はなかったと思うけれど、何かあっただろうか。

「……リンク、決裂してんのかこれ」

「え？」

重々しく繰り返された言葉の意味を一瞬取り損ねて疑問符を返してしまったけれど直ぐに、ああ、と足のポーチを開けて中身を見せた。

「ARCS持っていないんだよ、今」

「忘れたのか？」

「いや、工房の人から実習対応のために実機触りたいって要請があって」

歩きながら一通り経緯を説明すると、なるほどな、と事態把握の言葉が落ちる。

「繋がった感覚ねえから焦ったわ」

「あー、特にクロウはリンク決裂の感覚知ってるもんねえ」

「お前もだろ」

「私はA R C U S持っていないから未リンクの感覚はないよ」

とは言っても、みんなと——クロウと一緒にいる時は誰かしらとずっと繋がっていたから、戦闘で違和感が全くないと言ったらたぶん嘘になる。それでも、リンクが繋がっていなくなっただけの程度の敵であるならクロウが何を求めているのかぐらいい経験則でわかるというもので。それはクロウもおんなじだろうことはさっきの戦闘で明白だ。

だから非リンク状態というだけでそう狼狽されるとは思わなかった。

「……さっき何で公園にいたのか言わなかったせいで呆れられたのかと」

「え、いやいや。別に。誰も言いたくないことってあるだろうし」

その程度で呆れるならクロウに恋などしてはいないと思う。

そう。これはクロウは知らないことだろうけれど、この数ヶ月、考えてみればみるほど、私はクロウのことを何にも知らないということに直面しているのだ。あまり昔の話をしないから、私から聞いていいものかどうか判断もつかなくて、進んで保留している自覚すらあるほどに。誰かの内側に踏み込むというのは、やっぱりこわい。

「……いや、言いたくないっていうよか」

「よか？」

首を傾げてちらりと顔を覗き込むと、何かが恥ずかしいのか少し頬が赤らんでいた。陽の光がまだ高いこの時間でそんな表情を拝めるのは大層珍しいので、えっ、と逆に私が狼狽えてしまう。「お前はこういう公園とか、好きだろ。だから」

——だから。ええと、つまり？

発された言葉や態度から頭を回してみても、導き出された答えはあまりにも自分に都合の良いもので、いやこれ本当にそうなのか？と問い質してみたくなるものだった。二度三度問い質して、逆算して、それでもやっぱりそういうことなのは、と。

「……デートの下見、とか？」

クロウから答えが聞こえてこないのが、恥を忍んでそう問いかけてみると、先ほどから既に緩んでいたクロウの歩みがついに止まった。振り返ると、手のひらで目元を押さえて俯く姿。それでも赤い耳は確かに銀灰色から覗いていて。

「そ、ういうことだな」

観念した声音とともに顔を見せてくれるクロウがあまりにも可愛くて、ああこのまま時が止まればいいのにと一瞬でも本気で考えてしまった。

「って、なんでお前まで赤面してんだよ」

「いや、まさか、そんな可愛いことしてくれているとは思っておらずですね」

二人して顔を真っ赤にしてしまった昼下がりに。どちらからともなく、また足が動き始める。

明らかに沈黙の色がさっきとは打って変わったものになっていて、どうにも心が落ち着かない。それはクロウもそうなんだろうというのが、案外とわかるもので、ARCSがなくてもそれなりに心情的に伝わってくるものなんだなあ、なんて場違いなことを考える。

でもそれはきっと、相手がクロウだからなのだろうけれど。

「あのさ」

「ん？」

「公園、再開したら二人で来たいな」

するりと手を取ると、呼応するように指が絡められる。指が長くて、少し骨張っていて、私の大好きな手。カタチを辿るように繋いだ手の親指で甲を撫でると、同じようにさすられる。

「そだな」

「だから今日は私の用事が終わった後、大市デートで手を打ちませんか、クロウくん」

「……乗った」

お互い顔を見合わせて、ふっと噴き出して笑ってしまった。

デートというには私服と制服ですこしちぐはぐだけれど、君がそう笑ってくれるなら私たちの在り方はこれでいいのだろうと思う。

口から出た言葉は、10割嘘だった。

自然公園に來た理由は帝國解放戦線の作戦用で、別にセリのためなんかじゃなかった。パトロ
ンである領主側から協力を要請された大市掌握用の小作戦……というより小細工って言った方が
いいような気もするが、そのためだ。どう事態が動いても他のことにも繋げられるだろうから
了承した。

こういう時、俺は流れるように嘘をつけるんだって思い知る。ただの一欠片も自分を見せちゃ
いない、なんて驕ることは出来ねえけど、それでも見せてない部分の方が多いのは確かだ。

「あ、このストール、パルムのだ」

「パルムでは毎年職人同士が競い合う春の染め上げという行事があるんですが、そちらは今年の
優勝候補の方の作品なんですよ。織り方を工夫して光の当たり方次第ではピロードのような光沢
を持つのに、軽く薄く、これからの季節にぴったりの一枚かと」

「一枚あると結構華やかでいいんじゃないか？ お前シンプルな服ばっかだし」

だっていうのに、お前は俺がでっちあげた理由を察してデートの下見なんていう言葉で飾って
信じて、顔真っ赤にして、改めて二人で来たいだなんて言う。

繋いだこの心を絶対にいつか離さなきゃならねえのに、いつかこの関係は破綻するってわかってるのに、それでも、そんなことをされちまうとお前を俺の未来の先に連れて行きたいなんて欲が首をもたげるんだよ。テロリストの隣にお前がいる未来なんてあるわけねえのに。

「う、確かに柄物は……合わせるのちよつと苦手かも。クロウはその辺上手いよね」

「まあな。ようはどこに焦点合わせるかって話で、銃と似てんだよ」

「その発想はなかったなあ。なるほど……銃」

そういう、本当にそういうところなんだよお前。自他境界がかなりはつきりしてやがるクセに、すぐに人の……オレの言葉を信じるっていう、そういうところが、どうしようもねえ。かわいって言葉はこういう時に使うんだろうなって。たぶん直接言つたなら、クロウだから信じるんだよ、なんて少し口を尖らせて返してきたりするんだろうがよ。

発言の精査をしなくていい範疇に入ってる、その信頼が、信用が、たまに痛い。

「織物って一期一会ですよね」

「そうですね。同じ柄でも、何となく雰囲気異なるのは事実です」

「うん、これ買います」

会計を手早く終わらせて、太陽光を布が反射してなめらかにあわく光るそれを抱えたセリがオレに振り向いた。

「ね、今度これに似合う手持ちの服、出かける前に見繕ってよ」

「それお前の服をオレが選んでいいってことかよ」

「うん？ こっちが頼んでるんだけど……もちろん、いいよ」

自分の領域に、当たり前のようにオレを置く。

嗚呼、それが本当に。

いとしくて、くるしい。

「……この班分け大丈夫なんですか？」

端末室で資料片手に初回の特別実習について聞きながら清書用にキーボードを叩いていたところで、メンバー一覧を眺めて眉を顰めてしまった。

「まあちよつとしたスパイスにはなるんじゃないかしら」

「スパイス通り越して爆竹にならないといいですけど」

ケルディック組はそもそも噂が流れてくるような人物がいないので特に感想はないのだけれど、パルム組は二年生の私のところにさえも伝わってくるほどの犬猿の仲が含まれているのだ。これを分けずに一緒のグループにするとところがサラ教官らしいというか何というか。

「ま、最終的に殴り合って解り合うとかじゃないかしら？」

「別にクロウとアンは殴り合って和解したわけじゃないですから」

あれはいろんなピースがああ瞬間にハマったのだ。あの猟兵とは到底言えない傭兵たちの案件に巻き込まれたことを決して是とは出来ないけれど、あのタイミングであの事件がなかったらクロウとアンはいつ雪解けをしたのだらうとたまに考えたりはする。特に意味のない話だけれど。

「そうね。君たち全員の賜物ね」

「まあ、三ヶ月かかりましたけど」

「じゃあ少なくともそれくらいは見守ってあげましょ」

「了解です」

二人で、ふふ、と笑いながら手書きの資料をめくると、何故か私の名前が書かれているのが一瞬見える。と言ってもこんな実習関連のメモ書きに自分の名前が載るようなことはないと思うので、すわ見間違いかともう一度注視する。B班案内人、セリ・ローランド。

「教官？」

「……」

「教官？」

資料を両手で持って、窓際で黄昏ているサラ教官に訊ねる。これはどういうことなのかと。するとようやく、五回目ぐらいで困った風に笑った教官が両手を合わせて小首を傾げて来た。大人の人がする仕草じゃないと思いますそれ。

「パルムってもう行くだけで一日……いや下手すると二日仕事じゃないですか」

「そう、だからお願いしたいのよ」

「それならケルディックを私に任せて教官がパルムへ行くべきじゃないですか!？」

「そうなんだけどB班ってほらちよつとこう」

「その班分けしたのは教官ですよねえ！」

駄目だよっぱりスパイスどころか爆竹というか発破かもしれない。そしてそれを理解して私に任せようという教官の意図が……掴めないこともないところが正直ある。

「パルム、行ったことあるでしょ？」

「そりゃ、まあ、ありますよ」

パルムは帝国随一の織物産業を誇る町だ。おなじサザラント州で職人を抱える街として交流があるというのは確かで、私も叔父さん叔母さんについてパルムの元締めであるガラートさんと会ったことは何度もある。でもそれとこれはまた別で。

「白の小道亭って宿を取ってるんだけど」

「シチューとチキンパイが美味しい店ですね」

パルムは観光地も兼ねているため何軒か宿屋があつて、白の小道亭は特に美味しいのでアタリだと思ふ。というかやっぱりご飯の美味しさと宿屋を決めているのではないだろうか。モチベーション維持としては正しい選択なのだろうけれど。

「そうなのよ、これがお酒と合わせると本当に！」

「ってつまり教官も行ったことあるじゃないですか」

「おっと」

さも口が滑ったという風情だけれど、本当に言うつもりがないならこの人は言わないでいられる人だ。だからこれは戯れ。なればこそ私は考えなければならぬ。

VII組を見守りたい気持ちは、嘘じゃない。私たちを礎として更に研鑽を重ねてARCSが飛び立ち、その最中に今はいがみ合っている者同士がかけがえのない仲に発展したらそれは素晴らしいことだ。けれどそれを私たちが操作するわけにはいかない。あくまで見守る立場なのだから。

そしてサラ教官がケルディック組につくというのはそれだけ意味のあることだとも思う。ケルディックは交易の要衝。領邦軍の詰所があるということからもわかる通り、アルバレア公が見放すことはまずない。でもケルディックは貴族が直接統治する町ではなく、商人たちが創り上げ、現在は平民の元締めを中心として成立している場所だ。であるのなら、大市を何とかコントロール下に置きたいと考えることも？

そしてこの視点だとパルムはサザラント州、つまり賢主と名高いハイアームズ侯爵閣下が治める土地だ。生徒同士の諍いはともかく、受け取った課題が大事になる可能性は極めて低い。ああ、だからパルムなのだ。あの二人が。

仮にトールズの現理事でもあるレーグニッツ帝都知事閣下の息子さんが四大名門筆頭であるアルバレア家が管理する土地で何か問題を起こす……あるいはでっちあげられたなら、それは政治的な介入の口実になる。たとえルーファス公子が同理事といえども、止められないものになる可

能性だつて十二分にある。そしてアルバレア公爵家の人間がいることで建前上解決出来てしまうという初めての實習で濁りが生じる懸念も理解できるところだ。

故にサラ教官はケルディックへ赴き、例の二人はパルムを實習地とする。
つまり、理に適っている。

「……欠席点にはなりませんよね？」

「そこはあたしがなんとかするわ」

土曜の時間割は、導力学・栄養学・数学・歴史学。各教科の教官に土曜日の範囲を再度確認、自己学習し、わからないところがあれば後日聞きに行き欠席日のレポートを出すというところだ。該当日の理解を認めてもらえるだろうか。まあ、個人的に一番授業を受けておきたい軍事学と、煩いハインリッヒ教頭の政治経済がなかったのは不幸中の幸いか。

そして土曜は諦めるにしても、日曜の授業は夜行列車を使ってでも絶対に出たい。それぐらいの予算は出して欲しい。自腹で個室にグレードアップはさせるかもしれないけれど。

「初回のこれつきり、ですからね」

さすがに初めての實習で知らない土地に説明役もなしで放り出すというのは、あんまりにもあんまりな対応だ。久しぶりに、試験監督として袖通した学院支給のスーツを着ることになるかもしれない。トワから学院腕章一つ借りられないか交渉しておこう。青いやつじゃなくてもいいし。

「うん、ありがと。さすがに貸しにしておいてくれて構わないわよ」

「あは、じゃあいざって時に使わせてもらいますよ」

教官に貸しが作れたのなら、儲けたと思っておこう。

話し合いが決着したので、レジュメを作りながら開示していい情報を確認し、教官は差し当たって明日の実技テストに向けて、私は土曜に向けて各々準備することにした。

さてさて、初めてのの実習はどうなることか。

一一〇四年四月二十四日（土）

早朝、ジャケットと一泊程度の荷物を持って一階へ降りる。さすがにこの時間に活動している人は少ないので台所は広々としていた。食堂の適当なところに荷物を置いて各自が私物を入れておく棚から取り出したエプロンをつけ、パンを焼いてベーコンエッグを作りサラダを盛り付ける。昼は列車内で迎えることになるから、久々に車内販売で軽食でも買おうか。結構ラインナップが違ふことに気が付いてしまったのでちょっと楽しみではある

朝食を摂りながら今日のスケジュールについて考えていると二階から人が降りてくる気配。トワだ。食堂の扉が開いたところで視線が合う。

「セリちゃん、今日は実習の付き添いだよね」

「うん」

どうやら見送りに来てくれたのか、対面席にトワが座った。

「今日の欠席届は受け取ったけど、明日は授業受けられるの？」

「たぶん帝都で一泊するからね。パルムから旧都行き最終列車に乗って、そこからは定期飛行船で帝都ってルートにすればぎりぎりまでパルムにいられるし、帝都からなら一限間に合う計算でいるよ」

帝国の中央にある帝都駅は始点であり終点だ。旧都で迷うことはまずないし、列車と飛行船の時刻表の兼ね合いから可能だという計算もした。そしてトリスタは帝都から30分程度だし、そもそも入寮せず帝都から通いの生徒もそれなりにいる。寮に一旦帰らなければならぬので、通いの生徒よりは早く出なければならぬだろうけれど大した違いでもない。

「……宿は取れてる？」

「んー、いや、でも飛行船の到着時刻に合わせて飛び込みで入れる宿は何軒か見繕ってる」

こういう時にクロスベルの導力通信で予約が出来るシステムというのが、きつと便利なんだろうなと思う。だけどそもそもパルムを出立できるか、というのもあるので、あまり気は進まないけれど行き当たりばったりを良しとした。もしかしたら夜行に乗る可能性もあるわけだし、何ならチームの雰囲気によつては明日の授業も急遽欠席するかもしれない。

いろいろなことを考慮して、『決めない』ということを決めた。

「そっか。……あの、セリちゃんさえ良ければなんだけど」

そう切り出してきたトワの提案はまさしく日照りに雨と言ってもいいもので、少し迷った末に頼むことを決めた。トワも忙しいだろうに申し訳ないなあ。

ひとまず腕章はつけないまま二番ホームの端で待っていると、列車が来るとほぼ同時に目当て

の団体が連絡橋を渡って降りてくる。直接眺めていると視線などに敏感そうなガイウスくんは悟られてしまうので、気配だけで四人の様子を確認。やっぱり例の二人はいがみ合っているようだ。

ため息をついて乗り込み、腕章をつける。殆ど端と端だったため、Ⅶ組を見つけた時には男性の怒鳴り声が上がったところだった。早朝とはいえ他の乗客が全くいないわけではなく、急いで近づいて行くと背の高いガイウスくんが私を見つけたようで少し驚いた表情に。

それに笑いかけながらボックス席の前で立ち止まる。すると言い合っていたらしきユーシスくん&Mキアスくんは訝しむ表情を惜しまずさらけ出してきた。

「初めまして、トールズ士官学院一年Ⅶ組の皆さん。教官から聞いているかはわからないけれど、本日皆さんと同行する二年のセリ・ローランドです」

青い腕章を軽く叩きながらそう自己紹介をすると、セリ先輩がですか、とガイウスくんから言葉がこぼれる。

「お知り合いなんですか、ガイウスさん」

「ああ、入学直後に少しな」

「それで、僕たちに同行を？」

「はい。最初の実習ですし、不慣れな土地であると思うので、基本的な流れと質問を受け付ける教官の代理……ナビゲーターみたいなものです」

隣の空いていたボックス席に自分の荷物を置いて席に座ると、ガイウスくんが首を傾げた。直接関係のある話ではないけれどフィーさんはすっかり寝ている。まあその辺も含めて仲間内でサポートするだろう。

「監督……というわけではないんですね」

「そうだね、基本的には私の価値判断で貴方たちの行動を是正することはないかな」

命の危険があったなら介入する心づもりではあるけれど、まあさすがに今日中にそういったことにはならない……と思いたい。過保護でありすぎてはよくないし、かといって介入が遅いというのは論外だ。薄皮一枚の判断をする可能性を改めて心に刻み、全員の顔を見渡して一呼吸。

「この実習はかなりの自由意思が認められていることをあらかじめ把握しておいてください。現状私からは以上です」

そうして現時点で発生する少しの質問に答えた後、妙に重い空気を携えたまま帝都に降り立ち、パルム支線直通の列車へ乗り込んだ。

「あの、セリ先輩」

「ん？」

昼食も食べ終え勉強の気分転換にパルム行きの列車の最後尾デッキで風景を眺めていると、鈴

蘭のような声に名前を呼ばれる。振り返るとそこには夜明けのような色合いの髪を持つエマさんが立っていた。

「個人的な質問になるのですが、よろしいでしょうか」

「答えるかは内容によりますがとりあえず構いませんよ」

「ありがとうございます。その、ご出身はどちらか聞いても？」

出身。意外な質問だったので面食らってしまったけれど、さてどうしたものかどと考える。実習に必要そうなら答えることに抵抗はないけれど、わざわざ出身を聞かれる理由がまるで思い当たらない。とはいえ隠すほどのものでもないかと結論づけた。

「ティルフィルという、旧都の南西、イストミア大森林の南にある街ですね」

「ああ、だからB班に同行してくださいかったですか」

「はい、パルムは何度か訪れたことのある町ですから」

それ以外にもいろいろ要素としてはあるけれど、それを全て開示するほど私は優しくはない。それでも犬猿の仲な二人を含めるという班分けの思惑に巻き込まれた三人に対して、何も感情がないと言えそれは嘘になる。ある程度はカリキュラム運用側の事情だからだ。

「その、二人のことはもちろん、初めての実習で大変かもしれませんが、他の方とも協力して何とか課題と向き合ってください。実習の成功を私も祈っています」

なのでそう言葉をかけると、エマさんはゆっくりデッキの柵に手をかける。

「きつとまだお互い知らないことが多いため、こういったことが起きているんだと思います。想いはいつか伝わると私は信じていますから」

そう微笑む彼女と共にしばらく景色を眺めながら風を浴びて、ゆるりと席へ戻った。

16時。ようやくパルムへ到着し、駅から露天通りを抜けて予約していた宿酒場へ。扉を開けると夕食にはまだ早い時間のためかお客さんの姿はない。そうした店内のカウンターにはベルトラさんがいて、入ってきた私に気が付いたよう手で手を挙げてくれた。

「セリ嬢ちゃんじゃねえか、久しぶりだなあ！」

「ご無沙汰しておりました、ベルトランさん。今日はトールズ士官学院として予約を入れていましたが、部屋の案内を頼んでも大丈夫ですか」

「ああ、あれか。もちろん。男女同室って話だったよな。用意してるぜ」

はい、と応えようとしたところで、男女同室!?!、と叫びが背中側から聞こえてきた。振り返るとマキアスくんが口を戦慄かせている。

「ただでさえ鼻持ちならない男と同班だというのに、女子と同室というのは酷すぎませんか！」

「これはA班B班共通の実習内容です」

「だ、だからといって……君たちは気にならないのか!？」

マキアスくんが振り向いた視線の先、エマさんは多少の困惑を見せつつも士官学院生ですから、と答え、フィーさんは慣れてるからとすげもなく一蹴する。そうして、ふん、とユーシスくんが鼻を鳴らすのを彼は聞き逃さずに顔を向けた。

「女子と個室だからといってそう狼狽えるというのは余程やましいことがあるとみえる」

「……っ、何を!」

明らかな内面侮辱に対し、マキアスくんが拳を振り上げかけたところでガイウスくんがそれを難なく停止させる。ユーシスくんは足捌きで回避する予定だったみたいだけれど、まあこちらの方が穏当だったろう。

それにしても本当に、気持ちのこもっていない売り言葉だ。クロウとアンは殴り合いの末にリンク不安定に陥っていたけれどそれでも最低限、課題の迷惑にはならなかった。そういう意味ではあの二人はちょっと人間が出来すぎていたとも表現できるかもしれない。こっちの二人は可愛げがあるといってもいい。

「……他に部屋を取るというのはありませんか、先輩」

穏やかなガイウスくんに止められたことで勢いが削がれたのか、そんな質問が飛んでくる。

「自費で別の部屋に泊まっても特に報告したりはしないですね」

「それじゃあ……っ」

「それも貴方たちの選択です」

私の言葉にマキアスくんが怯んだ顔を見せる。選択という言葉に含まれる重さを何か感じ取ったのかもしれない。

「ただ、そうだな……ここからは引率者ではなくお節介な先輩としての言葉のだけれど」

少し言葉を崩して一呼吸。

「君たちは入学式のあった日、旧校舎で確かに自分の命を預け、他の命を守った。能動的な意思でVII組に所属するということは、そういつたことがこれからも起こり得ることを間接的に了承したのだと私は思っていた」

「……何が言いたいのですか、先輩」

「ARCUの試験運用は、ピンとは来ないかもしれないけれど命のやりとりをする可能性がある。その際、同じ班・同じ部屋にいることすら許せない相手に、自分の命を任せられる？」

去年私たちは、何度となく死にかけたと思う。もし世界線という概念があるのなら、誰かが死んだ平行世界があってもおかしくはない。そういつた積み重ねを経て、私たちは全員生き残ってきた。それを可能にしたのは間違いなくARCUで、そして何よりもお互いへの信頼だ。それがなかったなら、絶対にしなかったであろう行動がいくつもある。

彼らだから私はあらゆる選択肢の中からここに至るそれらを選び取ったし、そしてみんなの中にもそれぞれそういう選択肢があつただろうことは想像に難くない。

だからこそ、自分の命を預けている意識はもちろん大事で、そして誰かの命を預かっているということには特に自覚的であらねばならない。何かが起きてから、そんなこと知らなかった、では済まされないのだ。

これはマキアスくんやユーシスくんだけでなく、他の三人にもきちんと心に留めておいてほしい。

「仮にそんなつもりではなかったのなら、特科クラスの辞退をおすすめするよ。片方だけだとわだかまりが残りがねないのでその場合は二人とも。幸いまだ四月だから、多少浮くかもしれないけれど馴染みきれないってことはないでしょう」

踏み込んで、一步。無防備であつただろう心を切りつける。

「ただ辞退手前の相談なら私や、私が駄目でも……例えば生徒会長であるハーシエル、技術棟にいる技術部部长のノーム、それに貴族であればI組のログナーや、平民ならV組のアームブラストとか、先輩がきつと具体的に話を聞いてくれるから、それは活用してね。それに多少面倒くさがられるかもしれないけど、導力学のマカロフ教官に、もちろんサラ教官も。ベアトリクス教官もいいかもしれない」

A R C U Sという前提条件を課した上で、相談に乗れる面子をあげていく。相談に乗るのは別に私でなくてもいい。というより、これを言う私は信頼関係を築く相手として不適當だ。だからこそ、特に他の四人は何かを察して相談を快く聞いてくれるだろう。

……出来る限り留まっては欲しくはある。あるけれど、そんなもの人命には替えられない。私はⅦ組に携わる者として、はつきり言わなければならぬ。

「とは言っても、本当に、君たちの行動をコントロールするつもりはないから、これは単にお節介な言葉として受け取ってくれるとありがたいかな」

辞退するもしないも自由という前提の元、伝え聞いたオリエンテーションでの売り言葉に買い言葉のような形で在籍するのではなく、確固たる自分の意志でⅦ組に居ることを選んで欲しかった。それが伝わっているかどうかは、わからないけれど。

「……先輩のお考えは理解しました。取り敢えず今日のところは同室で構いません」

「はい、わかりました」

マキアスくんの言葉を受けてちらりとベルトランさんに視線を向けると、頷いて五人を部屋に案内してくれる。階段上へ向かう六人が見えなくなってから、荷物を床に、少しだけ崩れるようにカウンター席へ腰掛けた。疲れた。

この後は元締めと教区長に挨拶をして、実習課題の封筒を彼らに渡してもらい、今日課題をこ

なせずとも明日の行動指針を今日話し合えるよう時間を……この短時間で上から怒鳴り声が聞こえるのはなんぞでだろうなあ。

彼は制服着用、つまりどこかしらに所属を果たしている自分が外部で活動することによりその所属先が丸ごとどう見られるのか、というのをまだあまり意識していないのだろう。団体への帰属意識がないというのはそういうことだ。

教頭ではないにせよ、これから先の自分の未来やあるいは後輩たちのことを考えてもう少し、誇りある姿勢でもって活動を行ってもらいたい。……なんてのは絶対に言わないけれど。こんなものは自分がそう考え始めないと意味のない話だからだ。

そしてその言葉の売り買いの相手であるユースくんの問題がないとは、思わない。けれど反応をするなどというのも酷な話だし、言葉とはいえ敵意を向けられ黙って殴られ続けろというのは精神衛生上よろしくないことだ。マキアスくんにかなり強いバイアスがかかっているのは傍からだと一目瞭然だけれど、これも本人が自覚しなければ意味のないことだろう。

まあ、自分も貴族嫌悪が多少なりともあったのである程度の理解はするけれど、それでも決してあの態度を是とはできない。

まったく、前途多難なクラスだ。サラ教官を手伝う気になってしまうのも仕方ない。

想定以上に部屋のことで手間取っている間に駅へ走り超長距離導力通信でサラ教官に連絡を無理矢理つなげ現状の報告をすると、教官が急いでこちらへ来るといふことで少し早めに切り上げて帝都へ帰るよう指示を出された。おそらく飛行船ルートで来るだろうので、四〜五時間ほどか。心配ではあるけれど教官がこちらへ駆けつけるのなら明日のことは問題ないだろう。

そんなやりとりをして戻ってきたところでベルトランさんから実習課題がエマさんに手渡されていた。早めの夕食を摂りながらテーブル席で話し合う五人を見届け、食べ終わったところで荷物を持って私は立ち上がる。

全員の視線が私の方へ。

「今回の私の役割は終わったのでこのまま戻ります。実習が本格化する明日に女神の加護がありますよう」

告げると、心配そうな表情でエマさんが私を見る。大丈夫だよ、と安心させるように軽く頷いてから言葉を続けた。

「入れ違いで教官が来ることになってはいますが、そもそも貴方たちの行動の責の一切はツールズ士官学院にあります。つまり個人で責任を負う必要はなく、大切だと思った行動は、存分に。そして無必要だと感じたものを切り捨てることも自由です」

聞こえてきた課題内容からして、ケルディック組とはかなり課題量に差が出ていることは明白

だった。なんせA班は今日から既に活動を開始しているのだから。超長距離移動ということと、特定面子が険悪になるという前提もあってか課題量はかなりゆるく設定されていることが予測出来る。B班は人間関係まで含めて課題ということだ。

「それでは」

「うん、じゃあねー、先輩」

強張った空気の中、ゆるんだ声音で初めて返事をしてくれたフィーさんに手を振り返しながら、私は白の小道亭を後にし、元締めの家へと爪先を向けた。

パルムでの挨拶回りも終え、旧都に向かいそのまま飛行船で帝都へ。

シーズンではないからかちらほらとだけ埋まる客席の端の方に予約した席を見つけ、座り込む。すると途端に、人の怒鳴り声や悪態を聞き続けたせいか、妙に疲れている感覚が襲ってきた。あれは、どうにかしないと周囲のパフォーマンスが落ちるよなあ。特に心を砕きやすそうなエマさんが心配だ。

やっぱりサラ教官が来るまで待機しておくべきだっただろうか。口を出す出さないはともかく、同じ立場の人間以外のある種の権力を持つ存在が側にいる、という安心感は私でも提供出来た。

——でもそれは、この実習に必要なものなのか、という疑問もある。

「……わかんないなあ」

そもそもたかが一生徒にこんなことをやらせないで欲しい、という根本的な思考から逃げるために、壁に頭を預けて眠ることにした。一時間半もすれば帝都だ。

何気に初めての飛行船は無事到着し、巨大発着場であるヘイムダル空港ならではだろう円環連絡橋を通じてロビーへ向かうと、見慣れた制服が発発ロビーのソファに座っているのがわかった。

「トワ」

「あ、セリちゃんお疲れ様」

にこ、いつものように笑いかけられて思わず抱きしめそうになったのを何とか理性で押し留めた。……なるほど、アンのああいう行動はこういう心理に基づいているのかもしれない。また一つ友人を理解してしまった。

「セリちゃん？」

「んー、いや、トワに癒されている」

「あはは、やっぱり大変だった？」

「そうだねえ」

何があったのかというのを軽く報告しながら、空港を出ると道路の脇に車が停車しており傍ら

には男性の影。

「あ、叔父さん！」

「やあ、無事に合流できたみたいだね」

「うん、迎えにきてくれてありがとう」

銀色に近い髪色に、柔和な顔立ちのその人へトワが駆け寄っていく。私も慌てて近寄り、背筋を正した。

「あの、急なお願いをすみません。トワさんの友人のセリ・ローランドと申します。一晚よろしくお願いいたします」

「ふふ、こんばんは、セリさん。僕はフレッド・ハーシエル。トワの手紙でよくお名前を見ていたから、仲のいい友達だっていうのは知っているよ」

フレッドさんのお茶目な言葉に、トワが少し恥ずかしそうに顔を赤らめている。

「さ、夜も遅いし家に帰ろう。歓迎させてもらおうよ」
「ありがとうございます」

そう、朝にももらったトワの提案で、帝都ヴェスタ通りにある実家に今日お邪魔させてもらうことになった。それなら宿泊費は浮くし、連絡やチェックインの時間も気にしなくていいと言われたので、様々な要素を鑑みてお願いをしたのだった。

「二人ともおかえりなさい。それで、そっちの子が？」

車庫のある裏手の方から建物に入ると、奥からエプロンをつけた女性がばたばたとやってきた。トワの面影のある顔立ちに茶色の髪、すこし色合いは異なるけれど綺麗な金色の瞳。ああこの方がトワのご両親の血縁の方なのだとはつきりわかるほど。

「や、夜分遅くに失礼いたします。トワさんの友人のセリ・ローランドと申します」

「あはは、いいのいいの。トワが友だち連れてくるっていうだけで大歓迎だから。そうそう、あたしはマーサ。よろしくね」

遊びに来たというより完全に宿扱い状態なのだけれど、それでも本当にそれが真意で、つまりトワを可愛がっているというのがつよつよく感じられた。それこそ、里心がついてしまいうそうになるぐらいに。

「さ、お風呂入ってるから入ってきちゃいなさい」

「は、はい」

「じゃあ私が案内するね」

そう手を取られ、階段を昇ってトワが元々使っていた部屋に案内されて荷物を置き、寝巻きを渡されのんびりお風呂に浸かることになった。

久しぶりの湯船は、最高。

「お風呂先にありがとうございます」

「ほら、トワもさつきと入ってきなさい」

「うん。……あ、セリちゃんに変なこと言わないでね」

髪の毛を用意してもらっていたタオルで乾かしながらリビングへ行き、談笑していた三人の内一人であるトワと入れ替わり、勧められるままに椅子へ。ことりと淹れられたミルク入りの紅茶にほっとした。

「その、本当にありがとうございます」

「気にしないで。今朝イチでパルム行つて、後輩たちの面倒見て、そのまま帝都まで戻ってきたんでしょ？ そんな大移動したら疲れるわよ」

そう言われると確かにそうかも知れないとしみじみする。パルムは帝国最南端の町なので、つまりすごく雑に計算すると中央から行つて帰つてしたということは、帝国を縦断したと同じぐらいの移動距離になる。いやそう考えると本当に大仕事だ。

「トワがね、手紙で楽しそうに君や、ARCUUS試験運用を一緒に行っている友達のことを書いてくれていたんだ」

「だからあたしたちも会えて嬉しいの。ね、よければ学院のあの子のこと、トワが上がってくるまででいいから聞かせてくれない？」

じんわり、その言葉に心があたたかくなる。自分の大切な人がこんなにも愛されているのを目の当たりにするという機会は、実のところあんまりない。だから、私も彼女はいろんな人から大切にされているというのを伝えたいと思った。

「トワとは、去年の四月に出会ったんですが——」

思いつく出話に花を咲かせているところでトワが上がってきて、学院生活のことだと勘付いたトワにちよつと怒られながら部屋へと。

「心配させるようなことは言っていないよ？」

「セリちゃんだからそこは心配してないけど……ちよつと恥ずかしいというか」

「あは、トワが愛されていることは伝わってきたかな」

そう返すと嬉しそうに、うん、と間髪をいれずにはにかまれ、嗚呼本当に好きなんだなあと感じる。トワのそういうところが、とても愛しい。

「セリちゃんも叔父さん叔母さんと仲良いよね？」

「そうだね。愛されてると思う。それを疑うことだけは、絶対にしたくないぐらい」

そんな風に話しながら二人で髪の毛を乾かし合い、歯磨きをして布団に寝転んで、他愛のない話をしながら微睡んでいった。今日はもう寝てしまっている家族のことや、数年前に亡くなられ

たお祖父さんのことや、どんな風に育ってきたのか、いろんなことを。

VII組の実習が無事に終わりますように、とも祈って。

結局それは虚しい祈りに終わったわけだけけど。